



マンシヨ



ンに喰わ
れた町

川崎ゆきお

「朝から嫌なものを見たよ」

「何かありましたか」

「いやね、大したことはないんだが、いつものように食べに行って」

「牛丼屋の朝定食ですね」

「そうそう、自分で作るよりも安いんだ。シャケ定食なんだが、一皿おまけが付く、選べるんだ」

「僕も食べたことがありますよ。朝からお腹一杯になりますね。丼飯だし、味付け海苔と味噌汁と漬け物だけでもいいのに」

「その一皿がね」

「それが、何か嫌なことでも」

「嫌じゃない。その一皿を豚皿にしたんだ」

「一番良いやつを選びましたねえ。僕はとろろにしています。ご飯に掛けて食べるんです」

「それもいいねえ、ああいう粘着ものはスタミナが付く」

「それで、豚皿はどうになりました」

「重なったんだよ」

「シャケ定食でしょ」

「味噌汁を豚汁にしてもらっていたのを忘れていた」

「ああ、なるほど、でも、栄養が付いていいじゃないですか。損をしたわけじゃないし、それが嫌なことなんですか、今朝の」

「そうじゃない。そこを出て」

「出たのですか」

「食べ終えてね。もう満腹だよ。まあ、毎朝のことなんだけど、今朝は久しぶりに天気が良いんで、寄り道をした」

「牛丼屋はもういいんですか」

「牛丼屋の話じゃないんだ。寄り道したところがねえ……」

「そこで何かが起こったとか」

「何も起こらなかつたんだが、景色が変わっていたよ」

「何の」

「町並みのだよ」

「ああ、そうですか」

「君は知らないと思うが牛丼屋の西側は城下町だったんだ。古い町屋や大きな酒蔵が並んでいてねえ。長屋も多かったなあ」

「そんなのが残っていたのですか」

「結構ね。しかし、今朝何年かぶりに歩いてみると様変わりだ。古い家、商家なんだろうねえ。昔の、そんなもの殆ど消えていた。酒蔵の長い板塀なんて、もうない。大きな家具屋が建っているし、汚い長屋もあったんだが、高層マンションだよ。昔を偲ぶものってお寺ぐらいだが、これも鉄筋コンクリートの寺になって、いたし、門も閉まっておる。大使館のように警備が厳重になっ

ていた」

「僕もたまに寄りますが、そんな場所だったのですか。マンションが集まっている一角だと思っていましたが」

「崩れかかった酒造所の長い板塀、夜なんて、薄暗くて歩けなかったよ。今はマンションの玄関先で、綺麗になったんだが、これは違うんだなあ」

「それが、嫌なものを朝から見たって言うことですか」

「そうなんだ。ショックだよ。子供の頃、冒険でよく入り込んだ路地なんかも、もうないんだ。貧乏な同級生が長屋に住んでいてねえ。一緒に夏休みの宿題をしたものだよ。その長屋の小さな家でね。しかし玄関先には朝顔が咲いていて、清々しい場所だったんだ。いつも水をまいているようなね。そういうのは以前少しは残っていたんだが、もう根こそぎ持って行かれたよ。路地もね。そこにでーんと高層マンションだ。これには参ったねえ」

「まあ、時の移り変わりは早いですから」

「嫌だねえ」

「でも安い値段で朝定食が食べられるのも、この時代の恩恵ですよ」

「懐かしい町並みと交換かい」

「トレードです」

「そうだねえ。豚皿が付くシャケ定食を取るか」

「そうですよ」

了